

第Ⅰ章

は じ め に

1. 研究の背景及び目的

言語に障害のある子どもが支援を受けられる機関としては、学校に設置されている通級指導教室ないし言語障害特殊学級¹⁾、病院等、医療・福祉機関の言語治療室がある。いずれの場合においても、個々の言語症状の改善・軽減を図ること、言語能力の伸張を図ることが主要な目標とされ、いわゆる治療的な支援が一つの役割と考えられてきた。しかし、個々の障害状況も様々であり、言語症状の改善を図ることで子どもの抱える課題が解消する場合はよいが、言語症状の改善が困難な場合もあること、治療的な支援が子どもの抱える課題の解消に結びつきにくいこともありうること等から、特に教育の場においては、障害を含めた子どもの全体を捉えながら、子どもの暮らし²⁾を充実させていくための支援、すなわち生活充実指向型の支援も必要と考えられる。例えば、本人が自らの言語障害と上手くつき合いながら周囲と生き生きとしたコミュニケーションをする、言語症状の改善にいたらなくても本人の暮らしにくさが解消される、といったことに向けた支援の類である。

構音の不明瞭、吃音等の発話の非流暢性、語彙力・構文力等の未熟、等々の状態に対して、それを改善していくためのいわゆる治療的アプローチは、これまでの言語治療、言語障害教育の実践・研究において、課題は多く残されているもののかなり蓄積されてきている。しかし、生活充実指向型の支援に関しては、上述したように理念的には必要とされながらも、その内容・プログラムは確立されておらず、支援のありように関する議論も乏しいのが現状である。

また、言語聴覚士が国家資格化されたのを契機に、特に医療・福祉機関においては、言語治療、リハビリテーションの役割を果たすための専門性がよりいっそう明確になったが、それにともない、教育の場での言語障害への支援の役割・専門性を整理する必要性も生じてきた。教育の場における支援のありよう、教育として必要なこと、教育の場であるからこそできること等を整理することは、言語障害教育の根幹に関わることであり、通級指導

教室等の存在意義に関わることもである。このことは、言語に障害がある子どもへの支援に関して、教育と医療・福祉等との連携を進める上でも重要なことである。こうした中で、言語に障害のある子どもへの支援に関して、教育の場における役割を整理する上では、生活充実指向型の支援の検討は主要な作業の一つとなると考えられる。

以上のような背景からすれば、言語障害教育の場である、通級指導教室における支援内容を体系的に整理すること、特に生活充実指向型の支援のありようを明らかにすることは意義深いことと考えられる。従って、本研究の目的は、通級指導教室における言語に障害のある子どもへの生活充実指向型の教育支援内容・プログラムの構築に向けての知見を得ることにある。

生活充実指向型支援の大まかな発想は、冒頭に触れたように子どもの障害のみを見るのではなく、暮らしの充実を支えるようなものとして捉えられるが、その理念、着眼点、実践・研究の方法論等も含めて未開拓な課題であり、まさに本研究が「萌芽研究³⁾」であるゆえんである。その萌芽研究の性格、すなわち今後の研究の発展に寄与するという意味においても、生活充実指向型支援のありように関する今後の議論の題材・柱を提供することも本研究の役割と考える。

- 1) 現在、学校教育における言語障害児の指導・支援の場は、いわゆる通級指導教室と言語障害特殊学級がある。ともに「ことばの教室」等と呼ばれることが多い。前者は子どもの籍は通常の学級におき、必要時間通級による指導を受けるという制度上の場の呼称である。後者は子どもの籍を置く特殊学級であるが、一定時間指導し、その他の時間は通常の学級で学習するという通級方式をとることが多く、この場合、見かけ上は通級指導教室と同様となる。平成5年の「通級による指導」の制度化以降、設置形態としては通級指導教室が多くなっている。本研究では制度上の設置形態の違いによらず「一定時間、言語に障害のある子どもが通い、指導・支援を受ける場」を代表して「通級指導教室」の語を用いる。「ことばの教室」を用いる場合も同様である。
- 2) 本研究においては「暮らし」、「生活」を同義に用いている。
- 3) 科学研究費補助金制度における本研究の研究種目名。

2. 研究組織

- ・研究代表者 牧野泰美 独立行政法人国立特殊教育総合研究所
聴覚・言語障害教育研究部(平成14年度ー平成15年度)
企画部(平成16年度)
- ・研究分担者 松村勘由 独立行政法人国立特殊教育総合研究所
聴覚・言語障害教育研究部(平成14年度ー平成15年度)
教育研修情報部(平成16年度)

3. 交付額

平成14年度	1, 000千円
平成15年度	900千円
平成16年度	800千円
合計	2, 700千円

4. 本研究に関する発表等

<平成14年度>

- ・松村勘由・牧野泰美 ことばの教室担当者が重視していること(1) ー現状と課題ー.
日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 417.
- ・牧野泰美・松村勘由 ことばの教室担当者が重視していること(2) ー教室担当者の
記述からー. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 418.

<平成15年度>

- ・松村勘由・牧野泰美 言語障害教育の今日的課題と展望(1). 日本特殊教育学会第41
回大会発表論文集, 588.
- ・牧野泰美・松村勘由 言語障害教育の今日的課題と展望(2). 日本特殊教育学会第41
回大会発表論文集, 589.
- ・松村勘由・牧野泰美 我が国における言語障害教育を取り巻く諸問題 ー変遷と展望
ー. 国立特殊教育総合研究所研究紀要第31巻, 141-152.

＜平成16年度＞

- ・牧野泰美 関係論的視座からのコミュニケーション障害研究の動向．特殊教育学研究，第42巻第1号，75-81.
- ・松村勘由・牧野泰美 コミュニケーション障害研究と教育実践の課題と展望 ―言語障害教育を中心に―．日本特殊教育学会第42回大会発表論文集，422.
- ・青山新吾・牧野泰美 吃音のある暮らしへの援助（2） ―在籍学級担任との連携についての一考察―．日本特殊教育学会第42回大会発表論文集，770.
- ・牧野泰美・松村勘由（企画） 日本特殊教育学会第42回大会自主シンポジウム コミュニケーション障害への援助をめぐって ―「関係」「暮らし」「学校」「社会」という視点から―.

5. 研究経緯と本報告書の構成

本研究は、これまでの言語障害教育における実践の整理及びそこから検討されうる生活充実指向型支援に関する考察、各地の通級指導教室における言語障害のある子どもの暮らしの充実に視点を置いた実践及びそれに関する検討、議論、といった取り組みが中心をなしている。とりわけ、岡山暮らしとことば研究会、島根県聴覚言語障害教育研究会の先生方との議論や実践的取り組みから多くの資料を得た。従って本報告書の構成も、通級指導教室における言語に障害のある子どものへの教育支援、特に生活充実指向型支援に関する論考及び、岡山、島根の通級指導教室における実践的検討が主要な位置を占める。本報告書に掲げた、岡山の青山氏、島根の伊藤氏の報告には、生活充実指向型支援の構築・展開に向けた模索の軌跡が現れている。

6. 本報告書執筆者

青山新吾（あおやま・しんご）	岡山県・小学校教諭
伊藤修二（いとう・しゅうじ）	島根県・小学校教諭
牧野泰美（まきの・やすみ）	独立行政法人国立特殊教育総合研究所
松村勘由（まつむら・かんゆ）	独立行政法人国立特殊教育総合研究所

（牧野泰美）